



(財)三重こどもわかもの育成財団 機関誌

～親子で話そう 今日の出来事 一日一回！～

わかさぎ



INDEX

- 02** わかさぎ時評 6
【キャリア教育】は、
未来へ思いをめぐらす事始め
- 04** 子育ては先ず家庭から
- 05** 「平成19年度青少年育成指導者
のための研修会」報告

- 06** 父から子へ地域芸能の伝承
- 08**
 - ・青少年育成功労者等表彰
 - ・第30回「少年の主張三
重県大会」作品募集中
 - ・平成19年度青少年の生き生き
創造力活用事業協賛企業・団体
 - ・編集後記

〈編集発行〉

(財)三重こどもわかもの育成財団
〒515-0054 三重県松阪市立野町1291
中部台運動公園内
TEL : 0598-22-4911
FAX : 0598-23-7792
URL : <http://www.mie-cc.or.jp>



【キャリア教育】は、未来へ思いをめぐらす事始め



小林 清 良 さん

平成18年に国土交通大臣から
【優秀施工者】として表彰
平成19年に厚生労働大臣から
【卓越技能者(現代の名工)】に認定

文部科学省から【キャリア教育推進の手引き】が出ました今、小学校・中学校・高等学校では、生徒達の発達にそった職業観・勤労観の育成が課題になっています。子どもたちが生きるということの中で「働くこと・職業を選択する意識」を育むには、どのような支援が必要なのでしょうか。三重県技能士会会長小林清良さんにお話を伺いました。小林さんの職業は「かわらふき工」です。全日本瓦工事業連盟理事として、後継者育成に情熱を注ぎ、三重県技能士会会长として、県内各地域で、子どもたち向けのさまざまな「ものづくり」企画を実施されています(※)。

※三重県技能士会：33の分野で支部があり、1400人の会員と中央会員350名で構成。
ホームページアドレス
<http://www.geocities.jp/mieginoushi/index.html>

Q: 小林さんは“かわらふき”的お仕事で、【卓越技能者(現代の名工)】に認定されましたね。おめでとうございます。具体的にどのようなお仕事なのでしょうか。

小林さん：これは今までには無かった鬼瓦固定方法・なじみ土などの工法のことですね。日本は台風や地震があるのでね。鉄筋住宅に比べて耐震性が弱いといわれてる和風建築棟瓦・鬼瓦の伝統技能を若い頃から色々と工夫してた。〈軽量屋根構造・なじみ土盛土なし平かわらふき工法〉というのを考えたのね。平成8年の阪神・淡路大震災ではたくさんの建物・家屋が崩壊するほどの被害の様子がニュースで流れたね。でも、〈なじみ土盛土なし平かわらふき工法〉では全く落下しないで、耐震性が証明された。

Q: 小林さんが瓦の研究を重ねる、そのきっかけは何だったのでしょうか。

小林さん：やっぱり、家庭の環境でね。家が瓦屋だったので小学生の頃から、何か手伝ってた。大人が作ったのを外へ出して乾かしたりそれを入れたり、雨が降ってくると土が溶けるんで家の中へね。人手が要った。昔は水道があらへんで、川から水汲んで来いって言われて水汲んできたり、子どもでも間に合ういろんな仕事があって、中学になればその延長で瓦を作れるようになるんでね。手伝つてると、それが仕事みたいになってきてね。なんとなくすることがだんだんと分かってくるので、自分なりに顧客に満足される工夫も出てくるしね。仕事を継いでいたってことになる。

Q: 小林さんのお子さんは後を継がれて？

小林さん：継いでます。

Q: お孫さんも、何となくお父さんを真似て【おしごとごっこ】みたいなことをやっているのでしょうか。

小林さん：やってたな。息子は継がしたいと思ってるのかな。今の親は国語とかの学問的なことは分かっても、我が子が何が好きかっていうことは、分かってるのかなあ。

Q: 例えば、おじいちゃんとしては、お孫さんにどんなふうに期待をされます？

小林さん：「職人になれ」というのがなかなか言いづらいですね、今は職人的な仕事はすごく不景気でね、みんな困っている時代です。子や孫にはさせたくないというのが殆どです。

時代は変わっても、畳の上でくつろぐ良さは皆に好かれるよ

Q: 純日本風の家を建てたいと思う人は…

小林さん：今でも宴会では畳が人気みたいやね。今は、親族が集まる場はホテルや料理屋になって、自宅の襖を外して広間にして集まることが無くなっただ。婚礼とか法事や葬式は家ではやらんね。

今のは若い頃にヨーロッパへ行っていろんなものを見て、洋風に憧れた人等が家を建ててる時。しかし、60や70の歳になったら自分の家で座敷に座って庭を見たり、寝転がったりへと変わってく

ると思う。和室は、人が集まった時には襖をはずして2部屋を1部屋にできるように、融通がきく。土壁は夏も涼しいよ。

今は外国の若い人が京都や奈良の日本文化に憧れて来て、座敷に座って庭を見たり、寝転がったりしている。日本へ来て色々経験して帰ったら、今度は外国人のが和室のある家を建てたいと思う人が出てくると思う。向こうで日本建築が流行るといいね。今は世界的に日本食が流行ってるそうやね。

Q: そうですね、カナダではおしゃれな寿司バーが繁盛したり、「KOHADA」って何かと思ったら「小鰯」のことやったりね。スーパーの惣菜売り場にパック寿司も見ました。ユニークなお寿司もありましたね。

小林さん：外国で日本の家が注目されれば、日本の若い人も日本建築の良さの再認識へ向かうと思う。これは時代の繰り返しだと思いますけど。

Q: 寿司のように“和食文化”的次は、“住まいの文化”で輸出だといいですね…で、日本の若者が住まいの文化を誇りに思う…

小林さん：そういうこと。向こうで日本風の家を建てようと思ったら、職人をこっちから派遣すると思う。寿司職人と一緒。土地が広い国で、日本庭園が欲しいっていうのが出てくるんじゃないかな。

外国へ日本建築のハウジングセンターを

Q: カナダ風日本庭園、純日本庭園のようにね。そしたら職人さんも日本では間に合わなくなるから、向こうで育てるようになる。

小林さん：そうそう。今、日本のトヨタだとか、みんな技術者が日本から海外へ行って指導しますから、日本のブームは自動車ばかりやなしに食も住まいも。日本は外国のものを取り入れたがるけど、日本の大使館や領事館を日本建築で日本庭園にして宣伝して欲しいね。そういうものを各国に作っていったらいいかな。アジアがもっと発展してたら、日本好みになるかと思うんです。

外国で、日本で流行っているようなハウジングセンターみたいなものを作ってね、日本庭園とか日本建築を宣伝するというのも良いかもわからんね。そしたら日本ブームも起こるかな。

日本でフランス料理を食べるようなもので、アメリカやヨーロッパで日本建築もね。外国でも和食の次は日本の住いになってくると思う。すぐには無理と思うけど。

職場体験は段取りや気配りをつかむこと

Q: 職場体験に生徒達は来ますか。

小林さん：高校生が夏休みにアルバイトで来ますよ。

Q: アルバイトってどんな仕事内容ですか？

小林さん：瓦あげたりもするけれども、土上げで、瓦の下に土をひく仕事ね、粘土っていうか、壁土ですけれど。それを上げたり、配ったりするのに人手が必要。そういう仕事に間に合う。

Q: 土上げを経験して、また来るっていう人はいますか？

小林さん：そうやね、暑い夏休みにするんで体がしっかりしてる子やね。

Q: 「職場体験」と違ってアルバイトの仕事は賃金が貰えるのでそれなりにシンドイと思うのですが…

小林さん：そうやね、そのときは瓦を触らんから「この仕事してお金はこれだけ」やね。瓦屋のことはあんまり分からんでも、体がしっかりして、何かアルバイトに行こうと思うのがまた来る。で、職人がしている仕事を見ながら段取りや気配りをつかんで、仕事のだいたいが分かるのね。どこへ行つてもその仕事の仕組みというのが分からんと、仕事が仕事にはならんね。職場体験も、見ながら学ぶってのは一緒にないかね。

Q: 若者が海外のハウジングセンターで働くようになればいいですね。

小林さん：いいね…。

(文責：中西 智子)



子育ては先ず家庭から

名張市青少年補導センター協力員 吉住博光

昨年4月より、数人の仲間とともに午後児童の安全確保、更には午後4時前より駅前や大型店舗、ゲームセンターを中心に「愛の一聲」運動に携わっています。慣れない中での精一杯の声掛けに、「ただいま」のかわいい声とにこやかな笑顔が返ってくると、ホッと心が洗われます。

しかし中には、無言でじっと見つめ返してくる子ども、声かけに対して「ハイ」の言葉はあるものの、行動の伴わない子どももいます。深夜のパトロールでは、街灯も少ない夜道を制服姿で一人帰って行く女子高校生は、声をかけると、うるさい者を避けるかのように返事もせず、避けるように帰って行く。何かしら、寂しい限りです。

一方、地域的に明るい返事、素直な姿が返ってくる地域もあります。地域の方とお話しさせていただくと、通学途上にあるお店や農作業中の地域の人、すれ違う地域の人には、子ども達から元気な声がかけられるという、これを、地域の人々は、まるで地域の宝、自慢のように話してくれます。

一体、教育力とは何なのでしょう。「家庭の教育力」「地域の教育力」と言う言葉を何度となく目にし、耳にしますが、一向に先行きが見えて来ません。もちろん上の例が全てを物語るものではありませんが、目の前の子どもの姿、地域の方々の反応は他地域と多少違っているように思います。ここに地域の教育力、家庭の教育力があるのではないかでしょうか。

地域の子どもは地域で、子どもは地域の宝物等々の言葉を旗印、合い言葉として多くの地域で子ども達のために様々なイベントが開催されています。子どもが喜ぶもの、一人でも多くの子ども達が集えるもの等々、実に献身的に時間と努力を重ねていただいている。自分自身を振り返ってみて「今時の子ども達は幸せだなあ」とふと考へる時があります。又、家族でいろいろなところに行くことも今では多くなり家族の絆も深まっているかのようにみえますが、今なぜ子どもが親を、親が子どもを傷つけることになってしまうのでしょうか。そこに家庭、地域の絆、信頼関係の深さが気になってきます。時には同居的な親子関係、我が子への溺愛、自主自立を取り違えた放任、こうした姿が時折頭をよぎります。

どうでしょう、もう一度子どもの成長の姿を見つめてみては。今日の子どもは昨日の子どもではない。明日の子どもは今日の子どもではない。常に進歩と成長、自立していく姿が発見できるはずです。新たな目で子どもの一言一句、行動を見つめてみましょう。そこに必ず驚くような姿が発見できるはずです。そして子どもと一緒にその場で驚いてみましょう、喜んでみましょう。そこには、きっと強い絆と真剣な眼差し、子どもたちの確かな成長を発見することになるでしょう。

皆さん、お互いに頑張りましょう。



児童の下校パトロールの様子（名張市桔梗が丘付近）

「平成19年度青少年育成指導者のための研修会」報告

平成19年12月16日(日)に、三重県総合文化センター 男女共同参画センター 3F セミナー室Cにおいて、「平成19年度青少年育成指導者のための研修会」が開催されました。

県内各地から市町民会議関係者、青少年育成アドバイザー、県・市町行政関係者約70名の参加者が集い、県立特別支援学校西日野にじ学園校長の西口辰生さんの基調講演と県内の青少年育成市町民会議連絡協議会3団体による「平成19年度地域活動者研修会」の実践事例発表を行ないました。

基調講演

- ・軽度発達障がいのある子どもたちの理解と指導（抜粋）

県立特別支援学校西日野にじ学園校長 西口 辰生さん

講演では、軽度発達障がいの分類や定義、症状、判断基準、特徴の説明の後、指導上の配慮・支援の方法が詳しく解説された。また、機能低下による抑制の効かない原因としての説明では脳神経伝達物質の分泌異常などの専門的説明がなされ、参加者はメモを取りながら熱心に聞き入った。

事後アンケートでは、「一般にも知識を普及させる必要がある」「すべての子育てに通ずる」「一人ひとり違う対応が必要」「感謝と感動で生きる（笑顔）」などの意見が見られた。

「平成19年度地域活動者研修会」の実践事例発表

- ・「大人が変われば 子どもも変わる 地域が変われば 子どもも変わる」

伊賀地区青少年育成市民会議連絡協議会 大山田むらびとづくり推進会議

○理事長 廣島 義秀さん ○事務局 富岡 通郎さん 児玉 泰清さん

- ・「地域の子どもは地域で守る」～もっと子どもを知ろう～

松阪地方青少年育成市町民会議連絡協議会 青少年指導専門員 新田 久己さん

- ・「中学生からのメッセージ」

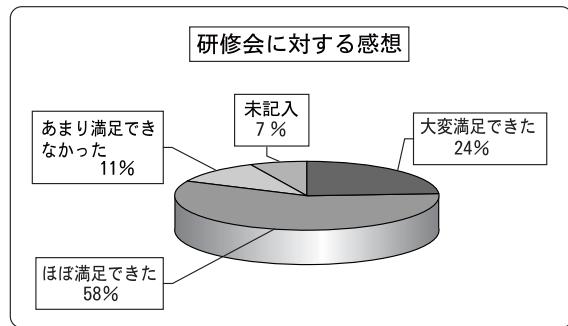
～子どもの声に耳をかたむけ、大人も変わろう。そうすれば子どもも変わる。～

紀北地区青少年育成市町民会議連絡協議会 青少年指導専門員 岡本 紘幸さん

各団体とも、地域の特色を生かした発表であり、各連絡協議会の会長・副会長の挨拶が事例発表をより盛り上げた。事後アンケートでは、「他地域の活動・取り組みが参考になった」「地域を大切にするには、地域を好きになる子どもを育てることが大切」などの意見が見られた。

選択式記入では、「大変満足できた」「ほぼ満足できた」と答えた参加者が全回答数の82%と、ほとんどの方から高い評価をいただいた。参加者の日頃の熱心な青少年健全育成活動意識が反映されたものを感じています。

今回、参加いただいた関係者には、この研修会で得られた成果を、それぞれの地域で生かされるものと思います。また、地域や世代を超えた新たな人間関係が築かれるものと思います。



父から子へ 地域芸能の伝承

三重県内には地域の村々で「羯鼓(かんこ)踊り」(「太鼓踊り」ともいう)が広く伝承されてきました。三重県の「羯鼓踊り」で使用する楽器の大きさは様々ですが、群馬県出土の埴輪「男子擊鼓」で左に抱えて右手で持つバチで打つ楽器(太鼓)や、雅楽で使用する「羯鼓」と同型です。三重県の無形民俗文化財「羯鼓踊り」は祈願成就のお礼踊り、念佛踊り、精靈踊り、雨乞い・豊作祈願の神事踊りなど、地域によって伝承の主たる願いに違いがあります。継承する場合にも、地域の保存会で継続する場合と、地域住民の連帯のなかで『○○家』の父から息子へと受け継ぐ場合があります。伊勢市には現在、宮川流域の佐八(そうち)町と円座町と麻加江町の「羯鼓踊り」で継承され、特異な衣装が際立ちます。『○○家』の父から息子へと受け継ぐ佐八町のご家族から地域芸能の伝承について伺いたく、佐八町の梅田 宏さん宅へ伺いました。息子さんはお留守だったので、改めて伺いました。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖ ❖ 父 息 子 ❖ ❖ ❖ ❖ ❖ ❖

父 三重県に羯鼓踊りは今でも伊勢街道沿いに多いし、伊賀でも続いているけど、【しゃぐま】を被る“かんこ”は、昔は6箇所くらいでしてたようやね。佐八の“かんこ”は初盆の供養踊りですが、次の日に神社でも。お寺と神社へ一日ずつ、祭礼の奉納行事として行いますよ。三世代の家だと、神棚と仏壇の両方があることって珍しくないですが、今の若い人の家ではどうかね。

“かんこ”が三重県の無形民俗文化財になったのはいつかなぁ…私は毎年の生活のことで、「無形文化財」って意識は無いよね。何百年も続いている行事で、佐八には「“かんこ”的生き字引」みたいな人ばかりです。佐八の人が踊り手の1年ごとの成長を見守ってくれて、年月が過ぎていく。それが当たり前のことでね。花笠を被っていた息子は、今は奈良に住んでいるけど「かんこ」の踊り手として当然のようにこの時期には帰って来ます。私自身が小学生の頃から経験しているので、息子へどうすれば見栄えが良くなるかとか、衣装や踊りについて経験的につい言うね。息子は不思議と素直に聞き入れてくれるなあ…。

母 あの子は8月が近づくと、特に用も無いのに電話してきたり、うずうずしてくるようね。



Q 血が騒ぐって感じなんでしょうね。羯鼓踊りを初めて見た9年前は、暗闇に浮かぶ斬新な衣装に驚きました。

父 【しゃぐま】という被り物と【しもた】のことでしょう。【しゃぐま】は個人の持ち物で、今は白馬の尻尾でつくることが難しいです。その年の踊り手がいない家から借りて踊る人もいます。踊りの最後には準備をする家(若家)へ感謝の舞をしますよ。皆、【しゃぐま】は佐八町の財産みたいな意識やね。

【しもた】は毎年、町民がスゲを刈って踊り手の家が作ります。よそに負けないようにと、親は一生懸命になりますね。

Q 頭に被る【しゃぐま】と腰に巻くスカートのように広がるスゲの【しもた】の衣装は、今では伊勢市内の円座町と佐八町に継承されているだけのようですね。今も継承されている県内の数多くの「羯鼓踊り」の衣装の多様さから、地域ごとの先人に「羯鼓踊り」へ深い思い入れがあったことが判ります。ただ、佐八町の伝承では父から息子へという決まりが続いている。これからも続くと拜察しますが、祭り事への強いこだわりですね。

母 佐八も子どもが少なくなってね、嫁いで来た頃の羯鼓踊りはおおぜいの踊り手がいて賑やかだったわ。

父 初盆の供養で踊るから、今年は亡くなった人が少なかったので時間的にも短かったね。さっき電話して今年の世話を呼んだら、ほら、来てくれた。彼の息子が花笠で踊ってね、それに今年は世話人で祭りを仕切ってくれて、会計報告したり、道具の貸し借りとかで忙しかったね。ごくろうさん。

母 いろんな立場の人とのかかわりに気を遣うのは大変やったろうね。

❖❖❖❖❖❖❖ 一人の住民としての存在 ❖❖❖❖❖❖❖

世話役 そうやね。祭りの時はみんなワーゲ寄って来て皆が一生懸命で、その世話を42歳までは勤めさせてもらうけど、今まで順番に皆がしてくれてた事やから。

Q 具体的にどのようなことをするのですか。

世話役 4月の初寄りで祭りの進め方を世話役の皆で検討するときに、15歳になった子を集めて皆に紹介して、礼儀作法とかを説く。15歳になると親の代わりに葬式にでも良いというように、町の行事全部に一人前として参加するわけ。普通は20歳で成人でも、佐八の子は15歳。

母 うちの子も初めての集まりの時には、その場の大人が男同士の付き合いの判断みたいなことを教えてくれるみたい。女性には分からないけど、でも町の行事へ行きだして一人前になったというのが実感で、嬉しかった。男親は、私とは違うやろな。

父 小学校4年生で踊り始めた時もそうやけど、15歳から若組で【しゃぐま】と【しもた】で自分が踊ったステップを息子が追いかけて上手くなる姿を見るとね、抜かれる喜びというか、何と言うか頼もしいね。

母 佐八から嫁に行った人とか親戚中が見に来て「親を抜いたな」って。まるで、子どもの成長の発表の場なんよ。【しゃぐま】は踊ってる間に傾いたりして、まっすぐに修正するのね。でも、息子の踊りで【しゃぐま】は修正したことない。

父 踊りも俺よりは上手い。確かに姿勢もいい。

世話役 それは父親の【しゃぐま】の被せ方が良いということですわ。親の自慢もある。息子も直さんと2時間くらい踊りきったという自負というか、頑張ったという自信になる。

私は親に踊りたくないって反抗した時期があった。親父からは「この踊りをまともにやれんもんはろくなもんになれんのや」「この踊りが務まらんかったら、世間でも務まらん」って言われた。今の子は反抗心がないね。皆がスーと練習に入ってくるよ。ところが、練習に全然顔出さんは、親が「うちの子が踊りたくないって言うから」と言ってくるのは、核家族やね。地域というのは、三世代が大事かな…。

❖❖❖❖❖❖❖ 次世代としての立場 ❖❖❖❖❖❖❖

子 小さい頃からかんこ踊りに参加するのは当たり前と思っていたし、小学生で【花笠】の頃は理由も分からず、見様見真似で踊っていた。ただ、夜の練習は友達と遊べるのが楽しかったなあ。中学3年生で【しゃぐま】の練習になってからは、大人が被るモンと思っていたのを自分が被るようになると、プレッシャーで緊張が続いた。その頃から、かんこ踊りに対する考え方も変わったのかなあ、休憩の時でも一人で練習したり、わからんところは積極的に世話人へ聞くようになっていた。

高校1年生の時に、15歳から42歳のく組入り>という組織のメンバーになる初寄りの時、目上の人から「組入りしたという事は、佐八町の中では大人になったと云う事やから、これから町内では挨拶したり、寄り合いにも参加するんやで」と言われて、【花笠】から【しゃぐま】に変わった事の重みを意識するようになった。それからは、踊りがもっと上手になりたい、家族や親戚、地域の人たちに喜んで貰いたいと、踊りに気持が入るようになったし、自分がいつの間にか【しゃぐま】の前の方で踊るようになると、自分達の代に変わってきたという実感が強くなって、「佐八町の伝統のかんこ踊りをなくしてはいかん」と、意識するようになった。

(※羯鼓踊りは1964年に三重県の無形文化財になっています。文責：中西智子)



※表紙の羯鼓踊りモノクロ写真は梅田さん宅に保存されていた
40年以上前の写真と息子さんの写真をお借りしました。

● 青少年育成功労者等表彰 ●

平成19年11月1日(木)に三重県総合文化センターで開催された「三重県青少年健全育成・非行防止関係者研修会」において、永年、児童・青少年の健全育成にご尽力いただいている個人10名、団体1団体が受賞されました。また、社団法人青少年育成国民会議会長表彰において、三重県からは1名が受賞されました。受賞された方は次のとおりです。

財団法人三重こどもわかもの育成財団理事長表彰（敬称略）

<個人の部>

永井 一司（桑名市） 法山三枝子（桑名市） 森川 和代（桑名市） 山田 勇（桑名市）
木村 正保（桑名市） 猪飼 康雄（木曽岬町） 嶋 かをり（鈴鹿市） 田城 朋子（鈴鹿市）
中森日出登（熊野市） 肥田 正博（熊野市）

<団体の部>

特定非営利活動法人 くわな子どもネット

社団法人青少年育成国民会議会長表彰（敬称略）

<青少年指導者の部>

片山 満徳（朝日町）



● 第30回「少年の主張三重県大会」作品募集中 ●

「少年の主張三重県大会」は、中学生が日ごろ感じていることや考えていることを広く県民に訴えることにより、青少年が自分の生き方や社会との関わりを考え、また、青少年に対する県民の理解・関心を深めることを目的として実施します。中学生の皆さん熱い主張をお待ちしています。青少年育成関係の方は、募集の協力を願います。

- ◆ 応募資格 ◆ 県内の国公私立中学校（特別支援学校中学部を含む）の生徒及びそれに相応する学籍又は年齢にある方。
- ◆ 日 時 ◆ 平成20年8月24日（日） 13:00～16:30（予定）
- ◆ 会 場 ◆ 伊勢市生涯学習センターいせトピア 多目的ホール
伊勢市黒瀬町562-12
- ◆ 提出期限 ◆ 平成20年5月30日（金）

※応募方法など詳細については当財団ホームページ（<http://www.mie-cc.or.jp/ikuseihp/>）を参照してください。作品応募者全員に参加賞を贈呈します。また、当事業に対して協賛していただける企業・団体を募集しています。協力いただいた場合は、参加賞、作品集等でお名前（企業・団体名）を表示させていただきます。

● 平成19年度青少年の生き生き創造力活用事業協賛企業・団体 ●

青少年の生き生き創造力活用事業に、次の企業・団体よりご協賛いただきました。
ここに、深くお礼申しあげるとともに、ご紹介させていただきます。（順不同）



編 集 後 記

子どもたちの学習意欲を高めることが大きな課題といわれていますが、「学ぶことは役に立つんだよ」と具体的に説明するのが難しいのではないでしょうか。例えば、誌上で紹介した「かんこ踊り」の青年のように、最初は真似る事への関心の持続から始まり、身についた学習効果の上に、少しずつ学ぶ内容の価値や目指す方向性が理解できた時、本人の努力が發揮されるようです。我が国の伝統芸能の学習スタイルを再確認させていただきました。さらに、地域の文化力が一人ひとりの子どもの育ちの教育力に大きな力があることを知らされました。

『わかすぎ』編集長 中西智子